

はだ さと  
“秦の郷”

し せき めぐ  
史跡巡り

し せき ゆい しょ しゅう  
史跡由緒集



麻佐岐神社 磐座

秦歴史遺産保存協議会

## まえがき

平成 25 年 12 月「秦の郷 歴史遺産」冊子を発行、この度、第二弾として「秦の郷 史跡巡り」史跡由緒集を作成いたしました。

作成に当たり、文献、ネット検索、諸先輩の話等により情報を収集し、編集しました。歴史については諸説あり、難しいところがあります。例えば、「古事記」と「日本書紀」とでは同一事象でも食い違いの部分があります。

当由緒集についても、私たちの知る限りの情報を元に作成しましたが、不明な点や謎の部分が多々あり、現時点での推測の域も入っています。今後の考古学の進展や発掘調査等による解明に期待しつつも、後世に伝承していく一つの試みになればと思っています。

なお、皆様からの多くの情報を頂き、改訂版も作っていきたいと思っていますので、事務局（冊子の末尾に記載）まで情報をいただければ幸いと存じます。

## 目 次

1. 一丁坵古墳群	1
2. 麻佐岐神社	2
3. 石畳神社	3
4. 秦原廃寺	4
5. 姫社神社	5
6. 金子石塔塚古墳	6
7. 秦天神社	7
8. 秦八幡神社	8
9. 金毘羅神社	9
10. 金毘羅神社（秦下・南秦）	10
11. 秦大坵古墳	11
12. 智恵山 古川寺	12
13. 荒平山城跡	13
14. 湛井堰十二箇郷用水	14
15. 一寸徳兵衛	15
16. 渡来人謎の秦氏	16

# 一丁塚古墳群由緒

いっちょうぐらこふんぐん

存在は以前から知られていたが、平成二十二年年度の植林事業をきっかけに存在が再確認され、一、四号墳については、平成二十三年六月二十三日総社市史跡に指定された。その後、総社市教育委員会の調査により、現在三三基が発見されている。

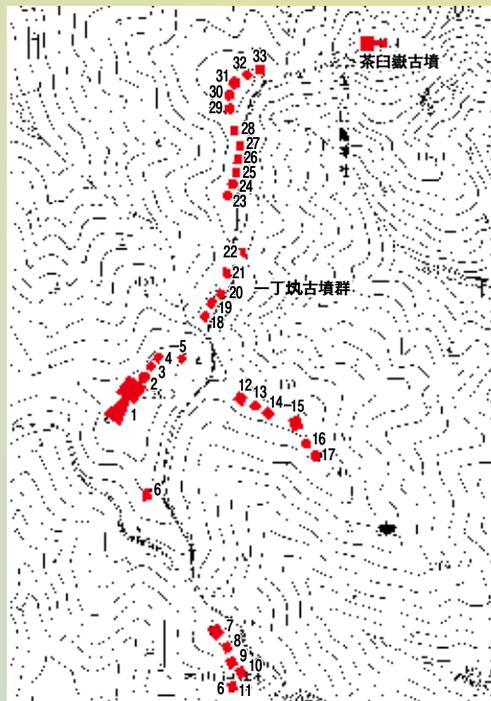
一号墳は、標高一八九メートルの急峻な尾根上にあり、発掘された埴輪などから、四世紀前半に築造された前方後方墳であることが判明した。墳長は全長七〇



1号墳（右が後方部）



1号墳トレンチ調査時の葺石



一丁塚古墳群配置図

メートル以上あり、斜面に葺石ふきいしがめぐらされている。埋葬施設は、蓋石らしき石材が墳頂の祭祀（雨乞い）に用いられていることなどから、竪穴式石室の可能性がある。

当古墳群では、断続的ではあるが四世紀前半から七世紀後半まで幅広い時期の古墳が築かれており、実に四〇〇年近く丘陵が墓域として利用されたようである。周辺の古墳も含めると、六〇基以上の古墳が築かれており、有力者の墓である秦上沼古墳、金子石塔塚古墳などの存在も併せて、地域史上重要視されるもの

である。

※葺石の、葺（ふく）とは茅（かや）などで屋根を覆うという意味と同じで、古墳の表面を直径約二十センチの石で覆うこと。

平成二十六年十月

秦歴史遺産保存協議会

# 麻佐岐神社由緒

まさきじんじや

一、鎮座地 総社市秦四〇三五番一

一、社格 式内社 村社（明治四十

年）

一、御祭神 大国主命・天照大神

おおくにぬしのみこと あまてらすおみかみ

一、創建 不詳（備中国一八社の

一座）（平成二十五年四

月再建時の棟札によると

三十七年頃）

一、御神体 磐座

いわさか

一、祈願 国家安泰・家内安全・五

穀豊穰



麻佐岐神社を鳥居から拝む



麻佐岐神社拝殿



遥拝所（金子池堤防）正面の山が正木山

一、祭日 毎年四月第四日曜日（現

在）

一、由緒

当社は吉備の国最古の創建と伝えられている、鎮座地の全山を正木山（標高三八一メートル）と称し、御祭神は山頂の磐座を御霊代（ミタマシロ）としているため、本殿はなく、山腹に御祓谷という地名が残っており、祓所があったと思われる。

御祭神は古来この磐座（巨岩）そのものと云われ、磐座信仰の姿が今に残る。磐座とは、岩石などに神を招いて祭祀

を行う神聖な磐境（いわさか）、岩肌のある場所や見晴らしの良い高山や容易に近づけない山頂などである。

岡山藩主池田侯が、干ばつの時に雨乞いの祈願所と定め、非常の災害、流行病などが起きたときには藩主が祈願の奉幣を行ったとされている。享保一八丑歳五月（一七七三年）岡山藩池田継政の自筆による五穀成就祈願の守箱が現存する。

御祭神は備中誌には天照大神、吉備郡神社誌には大国魂神（おおくにたまのみこと 大国主命と同じ）とあり、「日本書紀」本文によるとスサノオの息子とされている大国主命を祀る神社の代表は出雲大社で、大国主命は大国を治める帝王の意である。

磐座を取り囲んだストーンサークル的な石の配列されている磐境（いわさか）がある。

過去の拝殿再建履歴は、明治四十五年三月（一九一二年）、平成二十五年四月（二〇一三年）である。

平成二十六年十月

秦歴史遺産保存協議会

# 石畳神社由緒

いわだたみじんじや

一、鎮座地 総社市秦三九九五番地

一、社 格 式内社 村社（明治四十

年）

一、御祭神 経津主神ふつぬしのかみ

一、創 建 不詳（備中国十八社の一

座）

一、御神体 大岩塊（高さ約六〇メー

トルの石柱・磐座）

一、祈 願 水運・灌漑

一、祭 日 毎年七月第一日曜日（現

在）

## 一、由 緒

祭神の経津主神は国譲り神話に登場する神である。「ふつ」は刀剣で物がプツツリと断ち切られる様を表すもので、刀剣の威力を神格化した神であるという説のほか、神武天皇に与えた刀である布都御魂（ふつのみたま）を神格化したものであるとも言われている。

石畳神社は古来より本殿を設けず高梁川が大きく曲がる淵に聳える約六十呎の大岩塊（石柱・磐座）を霊代「よりしろ」（神霊が招き寄せられて乗り移るもの）としてお祀りをしている。

万葉集に「石畳さかしき山と知りながら我は恋しく友ならなくに・・・」と詠われている。

高梁川は古代の人々にとって、水運と灌漑の両面において極めて大切なものであったに違いなく、その高梁川は暴れ川で洪水による災害が多く川の氾濫を鎮めるために祭祀されたのではないかと思われる。

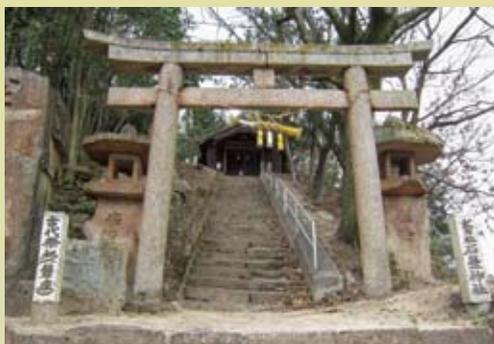
拝殿は御神体の大岩塊（石柱・磐座）の真下にあったが、昭和三十年「豪漢秦橋」を架ける時現在の所に移転され、当時は屋台も出て参拝者も多く盛大に行われていた。また、橋のない頃は、豪漢駅へは渡し舟で行き、また福谷地区との往來はご神体を取り巻くように、川の中に造った道を歩いていたが、昭和二〇年の大洪水により道がなくなり、昭和二十二年頃にご神体の磐座にトンネルを造り、交通の便が一段と良くなった。

平成二十六年十月

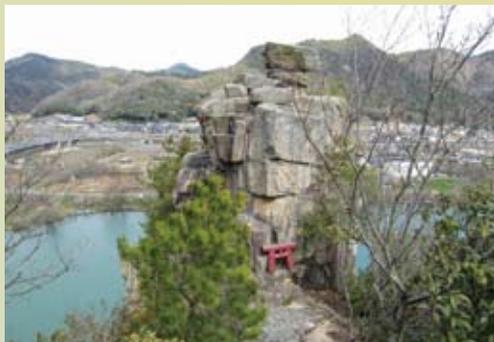
秦歴史遺産保存協議会



石畳神社ご神体（磐座）



石畳神社鳥居



最上部の磐座

## 秦原廃寺由緒

はだわらはいじ

飛鳥時代の創建とされ、聖徳太子の建立にかかわる四六ヶ寺の一つ（吉備郡誌による）、現時点で中四国最古の寺院跡と考えられている。渡来系氏族である秦氏の氏寺と伝えられている。

本格的な発掘調査がなされていないため、詳細は不明であるが、寺域は東西一町（約一〇八メートル）、南北一町または一町半（約一六二メートル）と想定される。南北一町の場合は、法隆寺近隣に



秦原廃寺跡



南門の柱（高野榎）（総社市埋蔵文化財学習の館保管）



秦原廃寺の瓦（総社市埋蔵文化財学習の館保管）

ある法起寺（世界遺産）と同じ伽藍配置となり、南北一町半の場合は、四天王寺式の伽藍配置になると考えられる。

由緒地には巨大な礎石が残り南門・塔・金堂のほか、講堂などの建物もあったとされている。飛鳥様式の単弁あるいは素弁の八葉蓮花文軒丸瓦や、吉備寺式と呼ばれる独特の文様を持った軒丸瓦・鬼瓦などが出土している。また、北側にある秦天神社境内で、瓦の窯跡が発見されている。

昭和四十年、農業構造改善事業による

土地改良事業工事で、南門の柱の高野榎が発見され総社市南溝手の総社市埋蔵文化財学習の館に展示保管されている。また、礎石は各地に分散保管されているが、そのうちの一つは秦小学校校庭に設置展示してある。

昭和三十四年三月二十七日、岡山県史跡に指定された。

平成二十六年十月

秦歴史遺産保存協議会

# 姫社神社由緒

一、鎮座地 総社市福谷一四二三番地

一、社格 式外社 村社

一、創建 不詳

一、御祭神 比売語曾神（阿加流比売命）

一、祭日 春祭（五月十三日）、秋季大祭（十月第二土・日曜日、新嘗祭（十一月三十日）（現在）

一、由緒

古事記によると応神天皇の代に新羅の



姫社神社鳥居



本殿及び拜殿



姫社神社

王子、天之日矛（天日槍）は美人の「阿加流比売」を妻としていたが、ある時、王子が罵ったので、自分の祖国に帰ると言って日本へ逃げて来た。その後、王子も妻を追って日本に来たとある。阿加流比売の誕生の説話には、聖なる神の石（赤い石）から聖なる乙女が誕生するという神女神石誕生伝承もある。

天之日矛の渡来集団に象徴される文化には、製鉄技術がある。

天之日矛の妻「阿加流比売」は比売語曾神とも呼ばれ、製鉄の神とされている。ヒメコソ神社と呼ばれる神社は全国にあ

り、当地総社市福谷の姫社神社、佐賀県鳥栖市姫方の姫社、大分県東国東郡姫島村の比売語曾社、難波の比売碁曾神社などが挙げられる。ルートとしては北九州から瀬戸内海、そして難波へと伝わったと思われる。

吉備の国が、製鉄王国であったと考える理由には、高梁川西岸・新本川流域など、吉備に製鉄関連の遺跡が多く存在していることがある。当地を渡来系の秦氏が住んだ地であったとすれば秦氏と天之日矛、阿加流比売を関連付ける説もあることから、姫社神社の建立に秦氏が関わった可能性も出てくる。天文元年（一五三二年）以前に姫社祭りが行われていたという古文書があることから姫社神社は古来の由緒ある神社である。なお、現在の本殿の屋根葺き替え（銅板）は平成七年、拜殿は平成三年改築された。

平成二十六年十月

秦歴史遺産保存協議会

かなごせきとうづかこふん  
金子石塔塚古墳由緒

金子古墳群は、総社市秦奥場に所在する。奥場古墳群中の一つで、奥場二号墳とも呼ばれている。この古墳の形態は楕円形で、墳長は南北二六メートル、東西二〇メートル、高さ三〜五メートルである。全長一・六五メートルの左片袖の横穴式石室をもち、玄室は長さ五・五メートル、床面幅一・九メートル、高さ二・四メートルである。中には家形石棺が置かれ、その材質は井原市で産出する貝殻石



石室入口



石室入口



古墳への道案内板

灰岩（浪形石）である。

石室内からは、須恵器、土師器、耳輪、玉類、馬具、鉄刀、鉄鏃のほか、冠または飾履しよぐりと推測される金銅製亀甲文板片等が出土しており、相当地位の高い人が葬られたと思われる。

墳丘と遺物の内容から、築造時期は古墳時代後期（六世紀後半）と考えられ、周辺の古墳群と併せて吉備の古代史解明の上で大きな謎とロマンになっている。

平成二十六年十月

秦歴史遺産保存協議会

# 秦天神社由緒

はだてんじんじや

一、鎮座地 総社市秦二二九七番地

一、創建 不詳

一、社格 村社

一、御祭神 菅原道真公すがわらのみちざねこう（八四五

〜九〇三年）

一、祈願 学業成就・国家安泰・家

内安全・五穀豊穰

一、祭日 毎年十月第三日曜日（現

在）

一、由緒

天満宮は「天神」（てんじん）、「天神



秦天神社鳥居



本殿及び拝殿



秦原廃寺の瓦の窯跡がこの境内の地面の下にある。

さま」「天神さん」とも呼ばれて全国にある。正式の社名は、天満神社（てんまんじんじや）、祭神の生前の名前から菅原神社（すがわらじんじや）などともいわれている。

政治的不遇を被った道真の怒りを鎮めるために神格化し祀られるようになった御霊信仰の代表的事例である。道真を「天神」として祀る信仰を天神信仰という。

道真が亡くなった後、平安京で雷などの天変が相次ぎ、清涼殿への落雷で大納言の藤原清貫が亡くなったことから、道真と雷の神である天神（火雷天神）とが

同一視されるようになった。

道真は学問の神様、誠心の神様として全国に祀られている。

過去の再建履歴は、本殿、幣殿は宝暦四年四月（一七五四年）、拝殿は享保十五年六月（一七三〇年）、幣殿、拝殿安政六年九月（一八五九年）、随神門は享保二十一年二月（一七三六年）及び慶応三年十二月（一八六七年）となっている。

平成二十六年十月

秦歴史遺産保存協議会

# 秦八幡神社由緒

はだはちまんじんじや

- 一、鎮座地 総社市秦一六一六番地
  - 一、創建 不詳
  - 一、社格 村社
  - 一、御祭神 仲哀天皇、応神天皇、神功皇后
  - 一、祈願 国家安泰・家内安全・五穀豊穣
  - 一、祭日 毎年十月第三日曜日（現在）
  - 一、由緒
- 当社は、昔「秦原の郷」橋本の庄（現在）



八幡神社鳥居



八幡神社鳥居



八幡神社跡（元八幡）

総社市秦付近）を氏子区域に持つお社であり、現在の地より村道（山道）を約三〇〇メートル登った野呂の地に鎮座していた。その地は現在のサントピア岡山総社の裏の地（プール側）にある。

当場所は正木山を望む地にあり、元八幡と呼び、隣地には神宮寺跡もあり、元禄七年（一六九四年）、現在の地に鎮座したものである。神宮寺古川坊は寛文七年（一六六七年）還俗となった。

なお、備前仏法沙汰により、寺院淘汰は神宮寺、福谷の観音寺、秦下の光禅寺、南秦の金龍寺である。

武家の守護神である八幡神自体が「八幡大菩薩」と称されるように神仏習合によるものであったため、幕府や地方領主によって保護され、全国で祈禱寺として栄えたものと思われる。

八幡神社は、秦氏が建立に関わったとする説もある。

過去の再建履歴は、本殿は元禄七年四月（一六九四年）、幣殿、拜殿は宝暦三年三月（一七五三年）及び弘化二年十一月（一八四五年）、随神門は享保一七年三月（一七三二年）となっているが、その後、随神門は台風で倒壊したため昭和二十九年再建された。なお、鳥居の基礎の石に秦原廃寺の礎石が使われている。

平成二十六年十月

秦歴史遺産保存協議会

# 金毘羅神社由緒

こんぴらじんじや

一、創建 江戸中期？

一、御祭神

大物主神おおもものぬしのかみ（「もの」は畏

怖おそすべき靈威れいゐを有する意

味、「ぬし」は総領支配者の意）

一、祈願

交通安全、稲作豊穰、疫病厄除け

一、祭日

三月第二日曜日（現在）

一、由緒

従来は福谷・上秦地区で管理していたが、荒廃して石垣のみ残っていたので、



金毘羅神社鳥居



拜殿



社務所

平成七年秦地区全体で再建した。

大物主神はへび神であり、水神または雷神としての性格を持っている。

海上交通の守り神として信仰されており、漁師、船員など海事関係者の崇敬を集める。神徳は極めて高いとされ、海上交通のみならず、交通安全に関しては日本でも随一の功德を誇るとする声もあがるほどである。

海運業者や商人によって金刀比羅信仰が日本中に広められた。国の守護神である一方、崇りなす強力な神ともされている。金毘羅神社は、香川県仲多度郡琴平町

の金刀比羅宮を総本宮とし、江戸時代に分社が各地に作られたが、明治維新による神仏分離、廃仏毀釈によって神仏習合の金毘羅大権現は廃止され、大物主神を主祭神とする神道の神社となった。

なお、鳥居の基礎の石に秦原廃寺の礎石が使われている。また、手水鉢にも礎石が加工され使われている。

平成二十六年十月

秦歴史遺産保存協議会

こんぴらじんじや  
**金毘羅神社由緒**（秦下・南秦）

一、創建 江戸中期？

一、御祭神 大物主神おおもののかみ（「もの」は畏怖おそすべき靈威れいゐを有する意味、「ぬし」は総領支配者の意）

一、祈願 交通安全、稲作豊穰、疫病厄除け

一、祭日 三月第二日曜日（現在）

一、由緒 秦下・南秦地区の氏子の金比羅神社と

して祀っている。

大物主神はへび神であり、水神または雷神としての性格を持っている。

海上交通の守り神として信仰されており、漁師、船員など海事関係者の崇敬を集める。神徳は極めて高いとされ、海上交通のみならず、交通安全に関しては日本でも随一の功德を誇るとする声もあがるほどである。

海運業者や商人によって金刀比羅信仰

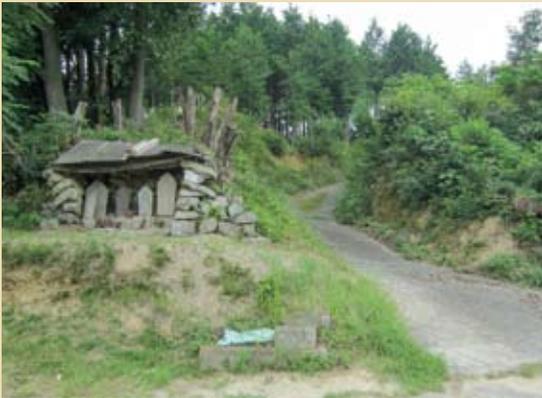
が日本中に広められた。国の守護神である一方、崇りなす強力な神ともされている。

金毘羅神社は、香川県仲多度郡琴平町の金刀比羅宮を総本宮とし、江戸時代に分社が各地に作られたが、明治維新による神仏分離、廃仏毀釈によって神仏習合の金毘羅大権現は廃止され、大物主神を主祭神とする神道の神社となった。

現在の拝殿は平成十三年（二〇〇一年）改築した。

平成二十六年十月

秦歴史遺産保存協議会



参道入り口



拝殿



祭壇

## 秦大坵古墳由緒

はだおおくろこふん

総社市秦山崎に所在する前方後円墳である。金子古墳群のうちの一基で、金子十号墳とも呼ばれる。

古墳の規模は、後円部が直径約三〇メートル、高さ約五メートルで、前方部が長さ約三三メートル、高さ約四メートル、最大幅約十七・五メートルとなり、墳丘全長は約六三メートルである。前方部を北西方向に向ける。

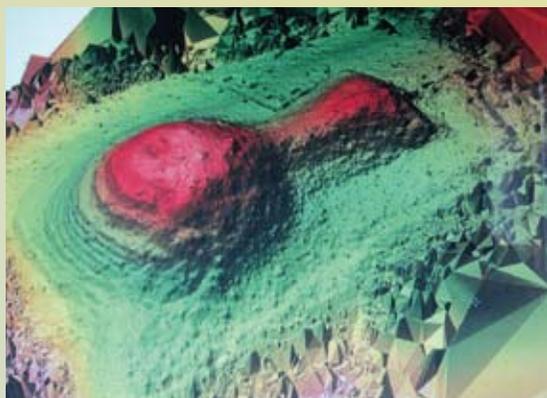
墳丘の形態的特徴から、四世紀前半に



左が後円部



葺石



3D画像（3次元デジタル画像）岡山大学 新納教授より

築造された、当地域の盟主を葬った古墳と考えられる。周辺には葺石と考えられる石材が残され、少量の埴輪片が採集されている。

今後の調査によって、古墳自体の謎や、地域における位置づけの解明が期待される。

平成二十六年十月

秦歴史遺産保存協議会

ちえいざん ふるかわじ  
**智恵山 古川寺由緒**

天台宗本山派 山伏寺（修験道）であり、御本尊は不動明王。

天正三年（一五七五年）火災に遭い（備中兵乱期）、古文書等消失したため詳細は不詳であるが、現存する古文書等から推測すると建立は、鎌倉時代（一二九二〜一三三三年）と思われる。また、備中誌には「神宮寺古川坊は大字秦、秦下、山崎に在り。神宮寺跡約三段歩許」とあり、「坊跡は山頂に在りて地域広く頗る展望に富む」とある。「黄薇古簡集」他に永正十七年（一五二〇



智恵山 古川寺



伯耆大山の大山様（地蔵堂）



神宮寺跡（サントピア岡山総社プール付近）

年）、総社市八代木村山城主上野伊豆守光濟から古川坊の山伏に橋本荘（現総社市秦付近）の「橋本庄十三社」の祭事を厳重に行うよう指示があり、古川坊の山伏が管理する神社名とその祭りを遂行するに要する田畑が与えられた。

寛文七年（一六六七年）岡山藩主池田光政の備前佛法沙汰により、住職還俗して、一は神職となり小橋大膳と称し、一は山伏古川寺薬師院に分かれたが、古川坊「是はもと寺にして古川坊と一山なりしなり」としてその後も修験道古川寺として地域の繁栄・安泰に力を注いだ。

旧暦二十八日を不動祭り、旧暦六日を役行者祭り、お月様を祭る二十三夜祭りの先達、地神祭を行い、年末には旧秦村一円にご幣を切つて配付、希望により家祈禱にも出向いていた。また、京都・聖護院に新しい住職が就任した時、天皇の大病などには、古川寺の山伏は京都にも出向いた。伯耆大山の大山様（地蔵堂）も祀っており、大山及び石鎚山に登拝していた。古川寺は児島の五流尊灌院の山伏衆徒直寺院として熊野行幸、大峯、葛城金峯等の御入峯には、五流長床勅命に依つて其の先達を拝した。

※神宮寺とは日本で神仏習合思想に基づき、神社に附属して建てられた仏教寺院や仏堂。別当寺、神護寺、宮神ともいう。平安時代、仏教が一般に浸透し始めると、日本古来の宗教である神道との軋轢が生じ、そこから日本の神々を護法善神とする神仏習合思想が生まれ、寺院の中で仏の仮の姿である神（権現）を祀る神社が営まれるようになった。

平成二十六年十月

秦歴史遺産保存協議会

## 荒平山城跡由緒

あらひらやまじょうせき

築城は永享年間以前（一四二九～一四四〇年）に地元の豪族、川西（河西）氏によって築城されたといわれている。一説には総社宮造営の遷宮祭が永享年（一四二九年）十一月二十八日に盛大に挙行されたとあり、式衆六十名、お供二〇〇名を従えて仮宮から本殿へ遷宮された。その中に願主目代安富次郎兵衛盛光、守護代庄甲斐守、守護代石川源左衛門尉、井山寺僧侶他十名、有力国人として川西（荒平山城主）、土肥、土師、伊達、

並びに近辺の城主等に十名の姓がみられるとある。

天守閣を持たない戦時のみの山城で、平時は麓（平城地区？）に館があったと思われる。通称城山と呼んでいる尾根上にあり、もっとも高い所は約一九一メートル、全長一五〇メートルにおよび、尾部は堀切となっている。他の三方は断崖で要害の地にあり、防御柵と土塀で造った七壇の砦できてきている。また、西の「尼子谷」には井戸があり今なお水を湛えている。

天正年間（一五七三年～一五八五年）の備中兵乱期には川西氏が三村氏（備中

松山城主 三村元親）に味方したため、天正三年（一五七五年）一月十七日に毛利勢に攻められたが、城兵は反撃し敵は数百人が川へ追い立てられ討ち取られた。

このため小早川隆景（毛利元就の三男）の命を受けた城主川西三郎左衛門之秀の親族の中島元行が、居城・領地の安堵を条件に毛利方に加わるよう之秀に進めた。しかし、之秀は「数代にわたる三村の親類」であることを理由にこれを断り、「籠城の諸勢を助けてくれるなら、四国へ退く」と約束し、下城し備前国児島を経て讃岐の由佐左京進秀盛のもとに落ちていった。

荒平山城は備中兵乱により一五七五年一月十九日毛利方の小早川勢によって落城。これ以降、廃城となったと思われる。

平成二十六年十月

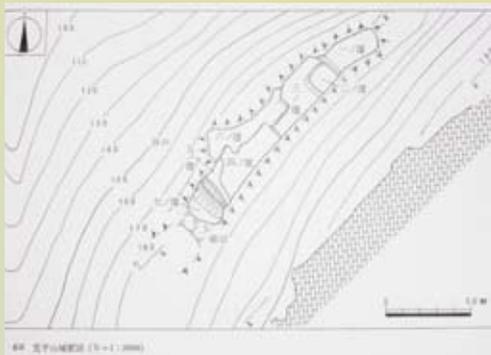
秦歴史遺産保存協議会



荒平山城跡



尼子谷の井戸(荒平山城跡から約15m下がった所)



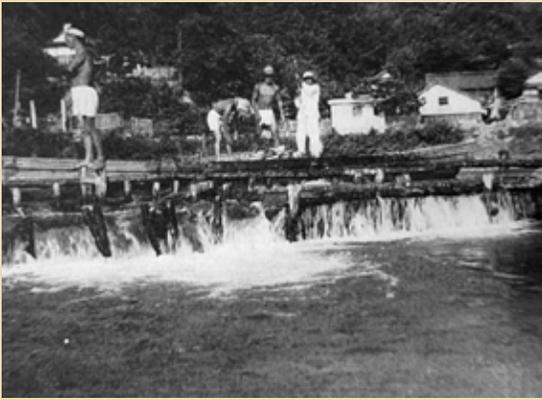
七壇の砦

「日本城郭体系広島・岡山」新人物往来社より

たたいげじゆうにかごう  
**湛井堰 十二箇郷由緒**

平安初期、現在の井堰より約一キロメートル下流の六本柳（通称六本）に井堰が造られたが川の流れの変化によって、用水の取入れが難しくなり、その後、現在の場所に移された。

その後、平安末期に妹尾兼康（平家の有力な家人）によって大改修が行われ現在のような用水になったと伝えられている。現在の総社市域・岡山市域・倉敷市域にかかる県下最大規模の灌漑用水である。



湛井堰の築造風景（昭和27年）



湛井合同井堰



兼康神社本殿及び拜殿（総社市井尻野）

じゆうにかごう  
 十二箇郷とは 刑部郷・真壁郷・矢田部郷・三輪郷・三須郷・服部郷・庄内郷・加茂郷・庭瀬郷・撫川郷・庄郷・妹尾郷を指す。

江戸時代はそれぞれの郷から選ばれた惣代出役の合議によって管理・運営され、高梁川から引水した。

引水は、高梁川左岸の井尻野地区にある「湛井堰」を通しておこなわれていたため、対岸は用水網の範囲外であった。加えて、十二箇郷が高梁川の水利権を独占していたため、秦地区は高梁川に望ん

でいながらまったく取水権を認められなかったのである。このため秦は溜池頼りで農業をおこなっていた。農業構造改善事業に伴い昭和三十八年、秦地域の水利権が確立され溜池は現在「上秦大池」、「金子大池」の二つとなっている。

平成二十六年十月

秦歴史遺産保存協議会

# 一寸徳兵衛由緒

いっすんとくべえ

江戸中期 正徳二年（一七一二年）に倉敷市玉島上成の庄屋・牧屋の跡取りとして生まれた。徳兵衛は若くして剣術・柔術の稽古に精進し、免許皆伝の腕前となったが、二十五歳で父と死別。庄屋を務めるも、性に合わず二十五歳の時、浪華に出て侠客に身を投じ、義侠心と道理の通らぬことには一步も引かない男気に浪華の民衆は「一寸徳兵衛」と愛称し慕っていた。例えば、ダンジリ争いで相

手方のダンジリ前に大の字に横たわり自分方のダンジリを助けたり、知り合いの芸妓に横恋慕する剣術の先生をやっつけたりといった類の武勇伝を多く残し、浪華きつての男伊達として鳴らした。歌舞伎「夏祭浪花鑑」では主役の団七九郎兵衛と義兄弟の契りを交わす準主役として登場。また、浄瑠璃での最終幕は、玉島の徳兵衛生家が舞台となっている。浪華で八年間過ごしたが、最後玉島生家に戻り三十五歳の若さで病に倒れた。庄屋 牧家の墓地に埋葬されている。

幼少（幼名・磯之丞）の徳兵衛は、当時の習慣に従って、秦の親戚（松永家）に里子として預けられ、十七歳になるまで育てられた。歌舞伎で有名になったので、徳兵衛とゆかりのあった人々が新しく墓を建てた。石畳神社の鳥居の隣に明治四十五年（大正元年）五月吉日に「一寸徳兵衛之墓」があり松永姓建立とある。

平成二十六年十月

秦歴史遺産保存協議会



一寸徳兵衛之墓（秦石畳神社 鳥居の左側）



昭和3年9月明治座  
「夏祭浪花鑑」

初代 中村吉右衛門

初代 中村吉右衛門による「一寸徳兵衛」（玉島テレビ放映より）



浄瑠璃「夏祭浪花鑑」の講演会  
（中央 一寸徳兵衛を演ずる中村吉右衛門）（同左）

## とらいじんなど 渡来人謎の秦氏の由来

日本書紀で伝えられるところによると、応神天皇の時代に秦氏の祖である「夕月君」<sup>ゆづきのきみ</sup>が百数十県の民、数万人を率いて、百済から渡来してきたという。しかし、秦氏（はたし）の研究で発掘された遺跡には新羅系の物が多く、現在は秦氏を新羅系とする説が有力である。秦氏は、土木、製鉄、養蚕、機織りの技術を持って渡来し、山城（現在の京都府）を中心に大和朝廷を支え、平安遷都にも大活躍したという。聖徳太子の知恵袋的存在で



秦原廃寺跡



秦原廃寺の瓦



姫社神社

あった秦氏の秦河勝は有名で、弥勒菩薩で知られている広隆寺も秦氏の氏寺であるが、その秦氏と当地総社市秦との関係は、きわめて濃厚なものと推測される。

秦氏は朝鮮半島に辰韓をつくり、新羅を経て、まずは九州北部豊前国を拠点にし、そして京都まで最先端の文明を持ちこんだといわれている。現在の岡山県にも秦氏が関係しているとされているものは極めて多数にのぼり、法然上人の母も秦氏であったという。県内に秦氏に関する事柄が多いからといって当地秦に秦氏が渡来して住み着いたという明確な根

拠は十分とは言えないが、その可能性は高いと言える。

これまでの物的な証拠としては、秦原廃寺の瓦の文様と秦氏の氏寺である広隆寺の瓦の文様がよく似ていることがあげられる。「秦原廃寺の一带は、和妙抄に備中国下道郡秦原郷で古代に渡来氏族の居住地であったことはたしかであろう。」「秦原廃寺も秦氏の氏寺であったと考えて間違いない。」「姫社神社も新羅と深い関係があり、秦氏は新羅から渡来したのではないかとする説が有力である。」「(薬師寺慎一編著 古代史辞典)との解説もある。

平成二十六年十月

秦歴史遺産保存協議会

## “秦の郷” 史跡巡り 史跡由緒集

---

発行日	平成 26 年 12 月
発行	秦歴史遺産保存協議会
編集	会 長 板野忠司
	副 会 長 登森康郎、片岡裕平
	事務局長 小橋武史

---

### 入会案内

会員数	320 名 (平成 26 年 4 月)
連絡先	片岡裕平 TEL 0866-95-8206
	小橋武史 TEL 0866-95-8156

---

※当由緒集は総社市市民提案型事業の補助金をいただき作成しました。



秦原廃寺出土 素弁蓮華文軒丸瓦  
飛鳥時代 径約15cm 総社市教育委員会提供